第38回　歯科衛生研究会プログラム

日時　平成25年3月6日（水）15時00分～19時30分

会場　日本歯科大学新潟生命歯学部　アイヴイホール

<15:00-15:05>

「開会の辞」

一般講演

座長　坂井由紀

<15:05-15:15>

1．バス法のストローク幅に関する研究

○後藤彩乃[1]、宮崎晶子[2]、原田志保[2]、高橋明恵[2]、煤賀美緒[2]、高塩智子[3]、両角裕子[4]

（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学、[3]新潟病院総合診療科、[4]新潟生命歯学部歯周病学講座）

<15:15-15:25>

2．市販ココアパウダーでう蝕は予防できるか

○関根智菜美[1]、中村直樹[2]、佐藤治美[2]、土田智子[2]、菊地ひとみ[2]、桑島治博[3]

（[1]新潟短期大学専攻科、[2]新潟短期大学、[3]新潟生命歯学部薬理学講座）

<15:25-15:35>

3．H小学校３年生における昼休みを活用したブラッシング指導の試み

○高橋明恵[1]、宮崎晶子[1]、佐藤治美[1]、土田智子[1]、原田志保[1]、菊地ひとみ[1]、煤賀美緒[1]、後藤彩乃[2]、関根智菜美[2]

（[1]新潟短期大学、[2]新潟短期大学専攻科）

座長　原田志保

<15:35-15:45>

4．歯周病歯の歯質変化に関する組織学的研究

○高橋正志[1]、森　和久[2]、又賀　泉[1]

（[1]新潟短期大学、[2]新潟生命歯学部口腔外科学講座）

<15:45-15:55>

5．患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：
２年間の利用者数の動向と車内調査の結果から

○小松崎　明[1]、小野幸絵[2]、江面　晃[2]、田中　彰[3]、関本恒夫[4]、五十嵐文雄[5]

（[1]新潟生命歯学部衛生学講座、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟病院口腔外科、[4]新潟病院病院長・小児歯科、[5]医科病院病院長・耳鼻咽喉科）

<15:55-16:30>
休憩

特別講演

座長　小菅直樹

<16:30-17:30>
『 新たなステージで活躍するために 』
槇田大介（株式会社ハーモニック）

<17:30-17:45>
質問時間
<17:45-17:55>
感謝状の授与・記念写真
<17:55-18:05>
休憩

一般講演

座長　内山美幸

<18:05-18:15>
6．新潟病院の看護記録標準化の現状と課題
—看護記録監査とアンケート調査から—
〇帆苅初枝[1]、小田典子[1]、戸谷収二[2]
（[1]新潟病院看護科、[2]新潟病院口腔外科）

<18:15-18:25>
7．歯科衛生科　学術・研究グループ活動報告
～５年間の学術・研究活動の変化～
〇坂井由紀[1]、長谷川沙弥[1]、遠藤祐香[1]、川﨑美紀[1]、野島恵実[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<18:25-18:35>
8．歯科衛生科教育グループ活動報告
～プリセプターシップ制度を中心とした新人教育の５年間の評価～
〇畠　由美子[1]、榎　佳美[1]、坂井由紀[1]、佐々木典子[1]、三富純子[1]
（[1]新潟病院歯科衛生科）

<18:35-18:45>

９．新潟病院歯科衛生科・患者サービス向上グループ５年間の活動報告

○鈴木明子[1]、松岡恵理子[1]、片桐美和[1]、小林えり子[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

座長　澤田佳世

<18:45-18:55>

10. 新潟病院歯科衛生科口腔ケアグループ　活動報告

○池田裕子[1]、渡部　泉[1]、松田知子[1]、風間雅恵[1]、金子文乃[1]
（[1]新潟病院歯科衛生科）

<18:55-19:05>

11. 歯科衛生科リスクマネジメントグループ５年間の活動報告

○高野貴子[1]、拝野敏子[1]、土田江見子[1]、本間浩子[1]、佐野公人[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟生命歯学部歯科麻酔学講座）

<19:05-19:15>

12. 日本歯科大学新潟病院歯科衛生科
歯科治療技術・材料グループの活動報告

○内山美幸[1]、白井かおり[1]、関根千恵子[1]、相方恭子[1]、澤田佳世[1]
（[1]新潟病院歯科衛生科）

<19:15-19:25>

13. 個人用防護具の着脱演習における評価から検討される支援の展開

○藤田浩美[1]、松木奈美[1]、山崎明子[1]
（[1]新潟病院歯科衛生科）

<19:25-19:30>

「閉会の辞」

特別講演

新たなステージで活躍するために

○槇田　大介
株式会社ハーモニック

三年間、学業と研鑽を重ねてきた目的は、「歯科衛生士となる事、歯科衛生士として仕事に携わること」とお考えの方もいらっしゃるかも知れません。
しかし、歯科衛生士になること、歯科衛生士として就業することは、一つの目標であり、通過点に過ぎません。
では、歯科衛生士の資格をとって就業することの「目的」は何でしょう。
本口演では、私が仕事を通じて学んできたこと、今まで出会った人たちから学んできたことで、皆様に役立つであろう事をいくつかお伝えいたします。

- 意識することがなぜ大切か
- あなたが働きたいと思う職場とは
- 職場が求める新人歯科衛生士とは
- 初めてお給料をもらう前に知っておいて欲しい事
- 「働きやすさ」と「働きがい」
- 人はなぜ仕事をするのか
- マズローの欲求５段階＋１
- 盥（タライ）の論理
- ホスピタリティとは
- 人生の目的地に着くために
- 言葉の世界、言葉の力
- 自分自身に向ける有効な質問
- 夢
- 心が折れそうなときに使う魔法の言葉
- 好きな道を選ぶのが本当の幸せ？

何か一つでも、心にとどめていただき、新たなステージで活躍していただければ幸いです。

バス法のストローク幅に関する研究

新潟短期大学専攻科　○後藤彩乃
新潟短期大学　宮崎晶子　原田志保　高橋明恵
煤賀美緒
新潟病院総合診療科　高塩智子
新潟生命歯学部歯周学講座　両角祐子

【目　的】　ブラッシング指導でバス法の説明をする際には，“微振動”や“細かく動かす”といった言葉を使うことが多い。歯科衛生士の教本にはバス法の説明として「毛先を歯周ポケット内に静かに挿入し近遠心方向に微振動を数秒間与える」と記載されている。しかし，この微振動についてはどの程度ストロークしたらよいのか具体的な規定はされていない。

そこで本研究では，バス法の知識の有無によるストローク幅の相違を明らかにするとともに，バス法のストローク幅とプラーク除去率との関係の検討を行った。

【方　法】

＜実験 1＞　バス法を熟知している歯科衛生士，歯科医師とバス法の知識のない歯科衛生士学生，事務職員の各 10 名を対象とした。対象者にバス法を実践してもらい，その様子をビデオ撮影後スロー再生によりストローク幅を測定した。

＜実験 2＞　人工歯に人工プラークを塗布し刷掃試験機を用いて清掃を行った。対象歯は下顎右側中切歯と下顎左側第一大臼歯とし，歯磨圧 200gf，10 ストロークと規定し 3mm，5mm，10mm，20mm のストローク幅別プラーク除去率を求めた。

【結　果】　ストローク幅の平均は，歯科衛生士群は 7.7mm，歯科医師群は 7.5mm，学生群は 10.4mm，事務職員群は 9.0 mmであり，歯科医師が最も小さく，次いで歯科衛生士，事務職員，学生の順であった。前歯部と臼歯部のプラーク除去率の比較では，10mm のストローク時，前歯部で 23.6%，臼歯部で 15.2%，20mm のストローク時，前歯部で 47.6%，臼歯部で 30.8%と 10mm，20mm 共に前歯部で除去率が高かった。逆に 3mm のストロークでは前歯部で 1.6%，臼歯部で 3.6%と臼歯部では 3mm で除去率が高かった。

【考　察】　比較的平滑な前歯部では，10mm，20mm のストロークで除去率が高く，豊隆が強く隣接面の広い臼歯部では 3mm の細かいストロークで除去率が高かったことから，部位によってストロークの大きさを変えて磨くことが効果的であると推察された。

患者指導の際は言葉のみの説明ではなく，部位ごとにどの程度のストローク幅で動かすと良いのかを実際に口腔内で実践し，体感させることが効果的であると考える。

市販ココアパウダーでう蝕は予防できるか

新潟短期大学専攻科　○関根智菜美
新潟短期大学　中村直樹　佐藤治美
土田智子　菊地ひとみ
新潟生命歯学部薬理学講座　桑島治博

【目　的】　近年，歯科領域においてカカオポリフェノールが注目されており，歯周病原菌およびう蝕病原菌に対し抗菌作用を有することが報告されている。本研究は市販のココアパウダーにおいても，う蝕予防効果が認められるかどうかを検証する目的で，実験を行った。

【材料・方法】　3 種類の市販無調整ココアパウダーを試料とし，2 種類のう蝕病原菌（*S. sobrinus* B13：以下 B13 と *S. mutans* MT6R：以下 6R）を用いて培養を行った。培養試料よりそれぞれの pH，菌体増殖量，不溶性グルカン合成量を測定した。pH はココアパウダー無添加の対象群と比較して pH を抑制している場合を，う蝕予防効果ありとした。菌体増殖量および不溶性グルカン合成量は，対象群と比較して増殖，増加を抑制している場合を，う蝕予防効果ありとした。さらに，測定結果をカカオポリフェノールの主成分であるエピカテキン，カカオ豆の外殻（ココアハスク）の作用と比較観察を行った。

【結　果】　24 時間培養の経時的変化では 8 時間目まで B13, 6R の両菌株では対照群との間に pH の有意な差は認められなかった。しかし 16 時間目から B13 において pH 低下の抑制がみられた。付着性の菌体増殖量は両菌株ともに 8 時間目から有意に抑制し，非付着性の菌体増殖量は 16 時間目から有意な増殖がみられた。不溶性グルカン合成量は両菌株ともに菌体増殖量の場合と同様の変化を示した。ポリフェノールを多く含有するココアほど，う蝕予防効果は高く，エピカテキンによる作用とほぼ同様の結果を示した。

【考　察】　本研究より市販のココアパウダーにおいてう蝕病原菌に対する予防効果を期待させる結果が確認された。さらに動物実験を行い，ココアの日常的摂取が菌体増殖量および不溶性グルカン合成量を抑制することを確認する必要があると考える。しかしポリフェノールを多く含有するココアパウダーにおいてエピカテキン単体とほぼ同様の効果があることが確認されたことから，歯磨剤やガムなど口腔内に作用する時間を長くする工夫を行うことで，う蝕予防への応用が期待できるものと考える。

H小学校3年生における昼休みを活用したブラッシング指導の試み

新潟短期大学
○高橋明恵　宮崎晶子　佐藤治美　土田智子
原田志保　菊地ひとみ　煤賀美緒
新潟短期大学専攻科　後藤彩乃　関根智菜美

【はじめに】H小学校では、以前より本学及び新潟病院の歯科衛生士による授業内での歯科保健指導と要所見者に対する個別指導が実施されてきた。本年度からはさらに3年生全員を対象に昼休みを活用した各児童3回のグループ指導を実施した。

このグループ指導により、プラーク指数にどのような変化があったのか、また1回目と3回目の歯科衛生士による指導内容を調査し若干の知見を得たので報告する。

【対象】対象者はH小学校3年生68名（男子37名　女子31名）とした。

【方法】各児童3回のブラッシング指導を実施した。毎回歯垢染色を行い、その後3～4名の児童に対して1名の歯科衛生士を配置し、個人に合わせたブラッシング指導を行った。また、1回目と3回目については、染め出された歯垢の状況をデジタルカメラにて、前歯部正面観のみ写真撮影を実施した。後日、1回目と3回目については写真と指導した内容を、2回目については指導内容のみを歯みがき指導カードにまとめ各児童の家庭へ配布した。

プラーク指数については、1回目と3回目で撮影した前歯部正面観の写真を用いて算出した。対象歯は12、11、21、22、4歯のB側面としOHI-DIを改変して統計処理を行った。指導内容については、歯みがき指導カードを用いて集計を行った。

【結果】プラーク指数は1回目1.40、2回目0.88と減少しており、全ての歯において有意差が認められた。指導内容では、①1歯ずつの縦磨き法で磨く、②歯頸部に歯ブラシを当てる、③歯ブラシを細かく動かすの順に多かった。

指導内容の項目数では1回目一人平均3.14、3回目一人平均2.52と減少が認められた。

【まとめ】昼休みという短い時間の中での指導ではあったが、3回実施したことにより児童のブラッシング技術の向上につながったと思われる。また、歯みがき指導カードを児童へ配布することにより、保護者へのアプローチの一助となったと考える。歯牙の交換時期であるため、今後も指導内容で多かった項目を中心に学校や家庭でも継続した指導の必要性を感じた。

歯周病歯の歯質変化に関する組織学的研究

新潟短期大学　○高橋正志、又賀　泉
新潟生命歯学部口外学講座　森　和久

【目　的】　歯周病に罹患して露出した歯根の組織構造の詳細な観察により、露出歯根の歯質の変化過程について検討した。

【材料と方法】　歯周病により歯根の一部が露出した日本人の小臼歯20本を使用した。抜去後、ただちに10%中性ホルマリンで固定し、頬舌側または水平方向の研磨標本を作製し、偏光顕微鏡、位相差顕微鏡、マイクロラジオグラフィーで観察した。また、同一標本の研磨面を10%NaOClで1時間脱有機または0.05 *N* HClで3分間腐蝕して、定法により、S-800型走査電顕（日立）で観察した。さらに、露出歯根の表面と割断面および象牙質内表面を同様にして走査電顕で観察した。

【結　果】　マイクロラジオグラムにおいて、露出歯根の研磨標本ではX線透過性の歯質変化を起こした部分が、セメント質表面からセメント象牙境まで穿通性に帯状に到達し、象牙質表層をセメント象牙境に沿って側方に進行しているように観察された。歯質変化のさらに進んだ露出歯根では、セメント象牙境に沿って亀裂がみられ、一定の範囲のセメント質のほぼ全層がブロック状に剥離されつつあるように観察された。セメント質のほぼ全層が剥離された部位では、象牙質表面が露出している部分だけでなく、きわめて薄いセメント質が残存している部分もあった。セメント質のほぼ全層が剥離された歯根部では、象牙質表層に、象牙細管にほぼ直交する方向の雁行状の多数の小さな亀裂が認められ、象牙質内表面では、原生象牙質と同様な形成面だけでなく、多数の細い線維状構造のみられる石灰化球が観察された。

【考　察】　今回の観察結果から歯根の露出による歯質の変化過程を復元すると次のようになる。歯頸部の露出セメント質の歯質変化は、穿通性に帯状にセメント質表面からセメント象牙境まで進行し、その後セメント象牙境に沿って側方に進行して、セメント象牙境に沿って亀裂が形成され、一定の範囲のセメント質のほぼ全層が順次ブロック状に剥離されて、最終的には露出歯根の全表面のセメント質を喪失する。その際、露出歯根に対応する象牙質内表面では、わずかではあるが象牙質が増殖する。セメント質のほぼ全層が剥離された象牙質表層には象牙細管にほぼ直交する方向の雁行状の多数の小さな亀裂が形成され、歯質変化がさらに進行すると、齲蝕が発生する。

患者との近接性向上を目的とした社会実験バス運行に関する検討：２年間の利用者数の動向と車内調査の結果から

新潟生命歯学部衛生学講座　○小松崎　明
新潟病院総合診療科　小野幸絵、江面　晃
新潟病院口腔外科　田中　彰
新潟病院病院長・小児歯科　関本恒夫
医科病院病院長・耳鼻咽喉科　五十嵐文雄

【目　的】近年、WHO の世界保健デーでも「都市化と健康」がテーマとされ、健康的な都市を目指す取り組みが世界的に普及しつつある。新潟市においても、健幸都市（スマートウェルネスシティ）を標語に政策を推進している。市大学連携研究事業においても、都市環境と健康増進との関連を検討するため、保健医療資源と住民間の近接性向上を目的とした社会実験を試みることとなり、社会実験バスを運行した。今回は、その事前調査として実施した来院手段聞き取り調査の結果について報告する。

【方　法】平成 24 年度の運行では、JR 越後線増発社会実験など、新潟市が行う他の社会実験を補完し、市が古町に開設する保健施設との連携も視野に運行計画を検討した。

また、利用動向の基礎資料を得るため、バス利用者および駐車場利用者に対して聞き取り調査を実施し、積雪期の通院困難性に対する認識等を検討した。

【結　果】平成 23 年度の９日間の運行（９往復 18 便）では、のべ 233 名の乗車数が得られた。一定乗客数が得られたことから、平成 24 年度では 20 日間運行（８往復 16 便）で実施することとした。バス利用者と車来院者を比較した結果、バス利用者の方が若い年齢の者が多く、車来院者の多くは新潟市内からの者が多いなどの特徴が認められた。

【考　察】住民と医療機関の近接性の確保は、プライマリーヘルスケアに基本的要件である。本学では在宅歯科診療の推進などで、その向上を強く推進してきた。加えて今後の地域医療機関には、通院の障害になる要因の改善など、より通院しやすい環境の整備も求められると考えられる。市街地地域生活基盤の悪化が問題視される時代を迎え、医療機関・住民の両面から近接性の向上を図る方策が必要と考えられた。

新潟病院の看護記録標準化の現状と課題
－看護記録監査とアンケート調査から－

新潟病院看護科　○帆苅初枝
小田典子
新潟病院口腔外科　戸谷収二

【目的】日本看護協会は、開示に向けての公的な記録の条件を 2005 年「看護記録および診療情報の取り扱いに関する指針」の中であきらかにし、記録の標準化に取り組むよう勧告した。看護科記録委員会は看護記録を見直し、記録システムを構築、プレゼンテーションを経て 2010 年から現在の標準化した記録方式を導入した。２年が経過しその成果と今後の課題が何かを明らかにすることを目的とした。

【方法】平成 23 年３月～平成 24 年５月に行った看護記録監査の結果、平成 24 年４月に行った病棟看護師への意識調査から４つのカテゴリーに沿って分析した。

【結果・考察】

１．看護記録方式の理解度

ＳＯＡＰ記録の形式を理解し患者の問題に焦点を当てた記載ができていた。また看護計画に基づいて実践に沿った看護記録になり一定の成果があった。

２．看護記録に要する時間の変化

フローシートの活用や記録の標準化で時間を短縮できるはずであったが、アセスメントに時間を要し成果は明らかでなかった。

３．アセスメントについて

アセスメントを文章化することが難しく自信がないと考えている人が多かった。看護過程のプロセスの見直しや、事実のみを正確かつ客観的に文章化する訓練が必要であると考えられた。

４．看護記録開示について

「人権・人格を侵害する表現」や「看護問題に関係のない記述」は減り、プレゼンテーションの効果があった。記録形式やマニュアルに沿った記録になったが、開示にむけては今後看護記録の質の監査に重点をおく活動が必要と考えられた。

【結論】

１．看護記録方式に対する形式の理解度は向上した。また、看護問題に焦点を当てた記録が書けるようになり、客観性に乏しい記述は改善した。

２．アセスメントに時間がかかる、やり方がわからないなど「看護過程」の理解が不十分であった。

３．開示ができる質の良い看護記録になるには、今後も監査を繰り返し行っていく必要がある。

歯科衛生科　学術・研究グループ活動報告
～5年間の学術・研究活動の変化～

新潟病院歯科衛生科　○坂井由紀　長谷川沙弥
遠藤祐香　川﨑美紀
野島恵実　三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【はじめに】近年、歯科医療の発展や患者の歯科医療に対する関心・意識の高まりに伴って、歯科衛生士の役割が増大し、より高度な知識と技術が求められている。そこでわれわれ学術・研究グループは、平成20年度から平成24年度の5年間に渡り「根拠に基づく口腔保健・衛生活動により人々の健康と福祉に貢献する」を歯科衛生科の目標に掲げ、歯科衛生士の学術・研究活動に対するモチベーションの向上と維持に努めることを基本とし活動を行ったので報告する。

【活動内容】
・情報提供（情報誌：Studyニュース）
・学術・研究活動への支援
・新人・現任教育
・歯科衛生科および個人の学術・研究活動の把握（アンケート）
・歯科衛生科の業績報告作成

【活動結果】情報提供として『Studyニュース』を年間5号（通常版3号、臨時号2号）計15号発行した。学術・研究活動の支援として、学内で行われる歯科衛生研究会や歯科衛生学会での発表に対しての支援や予演会を企画した。さらに新人・現任教育として1年目は口腔内写真の撮影方法と文献検索の資料を作成・配布し、2年目からは1回/1年研修会を行い支援に努めた。また、学術・研究活動の調査を行い、業績報告書にまとめた。その結果、歯科衛生研究会での発表は平成20年度は4件であったのに対し、平成23年度は15件、24年度は10件と増加し、歯科衛生学会での発表も年間1件以上が定着しつつある。

【考察・まとめ】学術・研究グループは「根拠に基づく口腔保健・衛生活動により人々の健康と福祉に貢献する」を歯科衛生科の長期目標として5年間活動してきた。われわれの自己評価として目標の達成までは至っていないと考える。しかし、臨床の場において学術的根拠に基づいた職務を遂行し、実習生教育へも還元できるようになってきたのではないかと感じている。また、特定の人物による活動が多かった5年前と比較して、歯科衛生科全体での活動が増加したことからモチベーションの向上が考えられる。学術・研究活動に対するモチベーションを維持し、向上していくことは難しいが、達成しきれなかった目標に向けて今後も活動していきたいと考える。

歯科衛生科教育グループ活動報告
～プリセプターシップ制度を中心とした新人教育の5年間の評価～

新潟病院歯科衛生科　○畠由美子、榎佳美、
坂井由紀、佐々木典子、
三富純子

【目　的】歯科衛生科教育グループは「良質な医療と教育を提供できる歯科衛生士になる」ことを長期目標として2008年度より活動を行ってきた。主な活動内容としては、新人・現任教育、新入職者へのマニュアル作成、教育に関する情報提供などである。中でも力を入れて取り組んできたのが、新人教育活動のプリセプターシップの実施と定着である。そこで、どの程度認識されているかを知り、今後の課題を検討したので報告する。

【対　象】新潟病院歯科衛生士31名

【方　法】プリセプターシップについて以下のアンケートを実施した。
Q1. プリセプターシップ経験の有無
Q2. プリセプターシップを知った時期
Q3. 自分が新人の時に必要だったと思うか
Q4. プリセプターシップによる新人教育の評価
Q5. ご意見（自由記載）

このうち、Q1のプリセプターシップ経験者をAグループ、科内でプリセプターシップが行われた経験のある者をBグループ、どちらも経験のない者をCグループとし、比較検討を行った。

【結　果】問1よりAグループ12名、Bグループ5名、Cグループ14名であった。Q2では「制度導入時に知った」が大半を占め、「制度開始前より知っていた」3名、「入職時より制度があった」7名、「知らなかった」1名であった。Q3より「自分が新人の時に必要であった」と回答した割合はA+Bグループでは82%であったのに対し、Cグループで57%であった。また、Q4の評価でもA+Bグループでは82%であったのに対してCグループでは43%と低かった。またQ5より、Aグループより良い経験になった等の意見があった一方、Bグループからはプリセプターの研修が必要、Cグループから周知が足りなかった、という意見も挙げられた。

【考　察】プリセプターシップに何らかの形で関わった方々には一定の評価が得られたと感じている。しかし、正規雇用でない新入職者や関わりのない人の認識・評価が低くなったのは十分な情報提供や報告ができていなかったためと考えられた。今後は実施したことの報告はもちろんのこと、歯科衛生科全体で情報を共有し、歯科衛生士教育活動に努めていきたいと考えている。

新潟病院歯科衛生士科・患者サービス向上グループ5年間の活動報告

新潟病院歯科衛生科　○鈴木明子　松岡恵理子
片桐美和　小林えり子
三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【目的】平成20年4月より歯科衛生科では7つのグループを編成し、そのうちの1つとして患者サービス向上グループが発足された。長期目標として「顧客(患者)の満足を得られる口腔ケアサービスを提供すること」を掲げ私達グループは患者さんへのより良い医療の提供を目指し、個々のレベルアップを目標に活動を行った。

【活動内容】平成20年から平成24年（12月）において以下の内容を行った。

・院内、院外セミナー参加
・歯科衛生士への資料配布（接遇基本5原則など）
・身だしなみアンケートの実施と報告
・各科セルフチェック表の配布・集計
・グループメンバーによるラウンドチェックとフィードバック
・歯科衛生士研究発表

【活動結果】5年間各科セルフチェック、ラウンドチェクを行い診療室の現状把握とグループ活動の評価を行った。チェック項目の中で活動開始当初よりも改善した点が多く見られた。しかし、スタッフ間の言葉遣い、診療室内での物音、雑音のチェック項目は改善されていない。ラウンドチェクでは歯科衛生士だけではなく歯科医師、学生、事務職員の身だしなみについての課題も多く見られた。また、セルフチェックとラウンドとチェックの結果に相違が見られた。

【考察】平成20年度からの活動を通し、院内、院外セミナーに参加、セルフチェック、ラウンドチェックを行った事により歯科衛生士の接遇に対する意識が高まったと考えられる。ラウンドチェックにおいて改善されにくい点は今後の課題として検討していく必要がある。また歯科衛生士以外の職員との連携も必要であり、患者対応の統一化を図るためにもラウンド結果を歯科医師、学生、事務職員にも周知させる必要があるのではないかと考えられる。今後ともより良い医療を提供していく事に貢献できるよう活動していきたい。

新潟病院歯科衛生科口腔ケアグループ　活動報告

新潟病院歯科衛生科　○池田裕子　渡部泉
松田知子　風間雅恵
金子文乃

【はじめに】新潟病院歯科衛生科口腔ケアグループでは、効果的な口腔ケアを提供する体制を整えるために平成20年度から活動してきた。今回今年度までの5年間の活動についてまとめて報告し、問題点の抽出と来年度への展開を考察した。

【計画】各年度の活動計画

① 平成20年度
・口腔ケア実施計画を立案しケアマニュアルを作成する。
・口腔清掃用具のパーソナルユース化を計画。

② 平成21年度
・歯科衛生士が行っている口腔ケアの現状を把握するためにアンケートを実施する。

③ 平成22年度
・口腔清掃用具を挙げ使用方法の確認と口腔清掃に関する文献の検討を行う。

④ 平成23年度
・口腔清掃用具一覧ファイルを作成する。

⑤ 平成24年度
・口腔清掃用具一覧ファイルについてのアンケートを基に改定する。

【結果と考察】広義において口腔ケアは院内の各科で歯科衛生士により行われている。その対象患者も目的もさまざまであり、使用する用具は多種挙げられた。また実施する歯科衛生士の経験年数や配属科により使用物品や種類が違うことがわかった。

口腔清掃に関する文献や新潟短期大学での教育を確認できた。

また口腔清掃用具の抽出により院内で使用されている用具の把握ができた。

以上から口腔清掃における物品についての指標は示されたが、適した用具を選ぶために作成した口腔清掃用具一覧ファイルには改善の余地があることが指摘された。今後は現在頻用している清掃用具のよりわかりやすい情報提供に加え、日々新しく発売される製品へのより速い対応と歯科衛生士全員への情報提供の方法、また技術向上のための方法を検討する必要があると考える。

歯科衛生科リスクマネジメントグループ5年間の活動報告

新潟病院歯科衛生科○高野貴子　拝野敏子
土田江見子　本間浩子
新潟生命歯学部歯科麻酔学講座　佐野公人

【目的】当病院歯科衛生科では、平成20年4月より自主的にワーキンググループを立ち上げた。歯科衛生科リスクマネジメントグループでは、「病院組織の一員として自覚を持ち、安心・安全な歯科医療を提供する」を長期目標に掲げ5年間動している。そこで今回、歯科衛生科リスクマネジメントグループのこれまでの活動内容と結果について報告する。

【活動内容】①インシデント報告書を提出しやすい環境作り。職員に対するインシデント報告書の積極的な提出の励行。自発的に報告させるために犯人捜しではなく、再発防止が目的であることの明示。②インシデント報告書の回収、集計、回覧。グループメンバーは、月毎に決められているラウンド担当診療科に行き回収する。回収、集計後、インシデント報告書を歯科衛生科に対し回覧し、今後の医療事故防止に努めている。③インシデント事例の分析、対策立案、実施と評価。繰り返し起きているインシデント事例に対しては、ＲＣＡ法を用いて分析し、対策を立案する。対策案は、職員全体に周知徹底し実施する。実施後は、時間の経過等による状況の変化によって、対策案が適切でなくなっている可能性があるため、継続的な対策案の見直しをし、必要に応じ改定する。④アンケート調査を行う。歯科衛生科へインシデントに関する調査を行い、個人の医療安全に対する意識を確認する。⑤院内研修を行う。学内講師による講義・演習を行い、医療事故分析の手法を学ぶことで、ミスの発生確率の低い手順、方法を確立する。

【活動結果および考察】5年間の活動を通して、インシデント報告件数は、減少した。その背景には、インシデント報告書から改善策を立案し、試行した事が考えられた。しかし、その反面インシデントが起きても、「報告書を書いていない」が、約半数いたことから、報告率の低下も考えられた。また、繰り返し起きている事例に対しては、ＲＣＡ分析を用いて根本的な原因を追究、改善策を立案、施行し、評価した所、再発防止に繋がった。このことから、医療事故の予防や減少の為には、インシデント・アクシデントを正確に把握し、分析と改善策の立案、実施とそれを評価する仕組みが重要と考えられた。

日本歯科大学新潟病院歯科衛生科 歯科治療技術・材料グループの活動報告

日本歯科大学新潟病院歯科衛生科
○内山美幸　白井かおり　関根千恵子
相方恭子　澤田佳世

【目的】

私たち歯科衛生科、歯科治療技術・材料グループは5年間の活動を終え、その活動内容について歯科衛生科でアンケートを実施したので、活動報告と合わせて報告する。

【対象および方法】

過去5年間の活動内容についてのアンケート
対象：歯科衛生科　31名

【結果】

セメント・印象採得のＤＶＤについて、見たことのあるとの回答は90%、そのうち自身の業務の参考になったとの回答は89%だった。また実習生指導の参考になったとの回答は82%であった。練和方法などを再確認できたとの意見があがった。

短大実習見学について、参加者は52%で自身の参考になったとの回答は87%、実習生指導の参考になったとの回答は81%であった。短大での指導範囲・指導方法を確認できたとの意見があがった。

材料保管方法の資料について、見たことがあるとの回答は 71%で自身の参考になったとの回答は 73%、実習生指導の参考になったとの回答は45%であった。誤った管理方法をしている材料を見直すことができたとの意見があがった。

材料新聞について、見た事のあるとの回答は100%で自身の参考になったとの回答は94%、実習生指導の参考になったとの回答は 58%であった。他科で使用しているものや新規材料が確認できたとの意見があがった。

総合診療科で焼きエキスカを中央管理に変更したことについて、その方法で消毒業務を行ったことがあるとの回答は45%、そのうち消毒業務が軽減したとの回答は87%だった。

【考察】

以上より、今まで行ってきた活動が衛生士自身や実習生指導に対し参考になったとの意見が多く長期目標の『歯科衛生士実習生に対して標準的な診療介助の指導を行う』ことを達成できたのではないかと考えられる。

しかし、特殊外来など配属科により指導内容が異なり、これらの活動が反映されていない部分もあった。また、ＤＶＤについては解説が少ないなど各項目で改善点もわかった。

今回の結果を参考にし、今後の活動につなげていきたい。

個人用防護具の着脱演習における評価から検討される支援の展開

新潟病院歯科衛生科　○藤田浩美，松木奈美
山崎明子

【目　的】歯科衛生科の院内感染防止対策グループでは、年1回の現任者研修を実施している。研修内容は、感染防止対策の最も基本となる手指衛生から個人用防護具（personal protective equipment：PPE）の着脱までとし、演習形式で5年間にわたり段階的に行ってきた。平成24年度の研修において一連の手順と手技・操作を評価するまでに至った。この結果から今後の支援策を検討し、次年度以降の活動に役立てたいと考える。

【方　法】日本歯科大学新潟病院歯科衛生科の歯科衛生士30名を対象に、平成24年度現任者研修のひとつとしてPPEの着脱演習を実施した。院内感染防止対策グループの歯科衛生士3名が評価者となり、手順および手技・操作をチェックリストに基づき4段階に評価し、演習終了直後にPPEの着脱に関する意識調査を行なった。調査は、無記名の自記式質問紙票を用いた。

【結　果】手指衛生（ラビング法）とPPEの着け方については、ほぼ全員が「よくできる」「できる」と評価された。PPEの外し方では、手順に間違いがみられ、特に手指衛生のタイミングに誤りが多かった。アンケートからは、PPEの着脱手順について、演習前から「知っていた」「おおむね知っていた」「あいまいだった」が、それぞれ約1/3ずつであった。演習により、PPEの正しい着脱手順をほぼ全員が確認することができた。自身が演習前に行っていたPPE着脱手順に誤りがなかったのは5名で、一部に誤りがあったとするものが多かった。演習によって正しい手順で着脱できる自信をほとんどが獲得し、臨床でも行うことができると回答された。

【考　察】就業年数が短い若年層において、手指衛生とPPE着脱の知識や技術に曖昧さや自信のない傾向がみられることから、入職時には必ず確認する必要がある。手指衛生は、毎年なんらかの形で演習に組み込んできているが、いまだ全員が手技を確実に実施できているとは言えない。現任者には、手指衛生を他者評価する機会が年1回程度は必要と考えられる。PPEの着脱では、外す手順の練習が必要であり、特に手指衛生のタイミングを重視した演習の必要性がある。手指衛生は、正しい手技での実施が基本となり、タイミングが重要になるため、患者ケアにおける具体的なタイミングの提示が必要と考える。また、PPEの適切な運用のためには環境の整備を促進し、PPEの使用が必要な治療・処置、ケア場面を具体的に提示する必要があると考えられる。